

転生したら捨てられたが、
拾われて
楽しく生きています。①

トロ猫
Toroneko

登場人物紹介

レオナルド

ミリーたちの暮らす国の王太子。好奇心旺盛な性格で城下町にもお忍びで顔を出す。

ジョー

ミリーの養父で、食堂兼宿屋である木陰の猫亭の主人。料理開発にひたむきで家族思い。

ウィリアム

木陰の猫亭のお客さんで冒険者。ミリーの賢さに疑念を抱く。

マリッサ

ミリーの養母で、夫のジョーと共に木陰の猫亭を経営している。心優しく、芯の強い性格。

エンリケ

商業ギルドの長でマリッサの祖父。家族には厳しいが、マリッサには激甘。

ザッカリー

木陰の猫亭のお客さんでウィリアムと仲の良い冒険者。楽天的な自由人。

ミリー

異世界転生した元日本人。拾ってもらった養父母の下、生活改善に奮闘中。美味しいものに目がない。

ニナ

ミリーの幼馴染の少女。内気な性格でおままごとが大好き。

マイク

ミリーの幼馴染の少年。わんぱくな性格で騎士に憧れている。

目次

「転生したら捨てられたが、
拾われて楽しく生きています。」 1

番外編

ミリーの魔法

書き下ろし番外編

木陰の猫亭リニューアルオープン

転生したら捨てられたが、

拾われて楽しく生きています。

1

プロローグ 美里亜とミリアナ

人生とは不思議だ。何が起こるか分からない――

「ミリー、二〇六号室の掃除は終わった？」

穏やかな表情で私に尋ねるのは養母のマリッサ。

ミリーとは私の愛称だ。マリッサに大きな声で返事をする。

「終わったよ」

「ねえね！ ボクとあそぶのー！」

弟のジークは、仕事が終わった私と遊ぶのを毎日楽しみにしているわんぱくな男子だ。

「これを洗濯したらね。それまでいい子にしてて、ジーク」

「ミリー、今日の夕食は楽しみにしておけよ」

「お父さん、もうお腹の虫が鳴いてるよ」

こちらは養父のジョード。豪快に笑いながら厨房に戻っていく。

私がこの世界に転生してもう八年になる。ここは、地球ではない場所。最初は、タイムスリップしたのかと思っただけ……この世界には魔法があった。

私の養父母であるジョーとマリッサの夫婦は、ダイトリア王国の王都ガイムで平民や冒険者向けの宿屋【木陰の猫亭】を営んでいる。

二人ともいい人で、私は彼らに拾われなければ、死んでいたと思う。

私の今世の親は、真冬に生後五か月の私を道に捨てたのだ。

私の前世の名前は、寺崎美里亜。奇しくも養父母が見つけた『ミリアナ』と似た名前だった。

美里亜は、三十歳で事故にあって亡くなったのだが……どのような事故だったかは、よく覚えていない。

前世の私は、普通の会社員だった。両親がいて姉がいたが、働き始めてからは何年も家族に会っていなかった。今では、前世の家族の顔も麗げだ。仲が悪かったわけではない。前世の寺崎美里亜は幸せであったと思う。

養父母には、私が五歳の時に生まれた実子のジークがいる。実子が生まれても養父母

は以然と同じように接してくれ、弟と分け隔てなく育ててくれている。

木陰の猫亭では、五歳の時から働いている。日本だったら兎相案件だろうが、この世界では当たり前のことだ。平民の子供は、五歳から家業を手伝う。自営業ではない家庭の子は、八歳頃から見習いを始める。殆どの子供が親と同じ職業に就く。

今の家族は好きだが、日本での記憶がある私には、この世界は正直生きづらい。特に衛生面。あと、庶民の甘味はたまに手に入るフルーツくらいしかない。いや、砂糖が存在するにはするんだけど……庶民が簡単に買える値段じゃない。貴族や裕福な人なら余裕で買えるだろうけど。ああ、コンビニスイーツが懐かしい。

魔法は貴族、平民関係なく使うことができるが、平民は魔力が少ない者が多い。種類は、大きく生活魔法と属性魔法に分けられる。

平民が主に使用するのは生活魔法で、照明に使われる【ライト】、コンロなどに火をつける【ファイア】、身体を綺麗にする【クリーン】が一般的だ。

属性魔法は、四大元素の【水】【火】【風】【土】が基本だが、それに加え【白】や【黒】の魔法がある。他にも、国や地域により特別に存在する、地域型の属性魔法もある。

基本的に属性魔法の適性は一人につき一属性が多い。魔力量により個々の威力が異な

り、強い魔力の持ち主には貴族が多い。

不思議なのは、クリーンがあるのに衛生面がやばいこと。手を洗わないとかいうレベルではない。とにかく、汚れが酷いのだ。クリーンがあるのになんでみんな使わないの！

私は転生特典か何か知らないけど、属性魔法も多種類使え魔力も多く増やすことができた。

魔力は、五歳になれば教会で測ってもらえるのだが、私はその検査を受ける前にワザと大量の魔力を使い、魔力の少ない状態で検査を受けた。結果、魔力量弱の最低ラインとの判定を受けることができた。

そんなことをしたのは、魔力量が多いと貴族や権力者に狙われると聞いたからだ。力のない平民の子供は、魔力量のせいで貴族に目をつけられると人生の選択肢がほぼなくなる。貴族の養子になるか、学費の援助を受けながら貴族の下で働くことになる。私は餓い殺しなんて絶対嫌だし、家族とも離れたくなかった。

貴族の第一印象は最悪だった。王都の中心区に買い出しに行った時、なんとか男爵という、体重過多で自分で歩けるかどうかも怪しい人物が、何を気に入らないのか従者を杖で叩いてたのを見た。両親にも貴族には関わると口酸っぱくお願いされている。

「ミリ、ジークの相手をありがとう。そろそろ、昼を食べなさい。あと……髪をまた染めないね。生え際が伸びているわね」

養母のマリッサが私の髪を撫でながら言う。私の地毛の色はストロベリーブロンドだ。ブロンド系は王族や上級貴族に多いと言われている。平民は茶や赤茶、黒の髪色が多い。一歳まで殆ど髪の色が生えていなかったのも、私を捨てた親も私の髪色のことは知らないだろう。知っていたら、捨てずに利用されていたと思う。

小さい頃は、権力者や良からぬ輩に攫われないように布帽子で髪を隠す対策ができていたが、今は赤茶色に髪の色を染めている。

「お母さん、今日の夕食は何か？」

「ジョーが、あなたの好きなオークカツを揚げていたわよ」

「わーい！ やったね！」

こうして穏やかな日々は流れている。……最近は何々と忙しいけど。

異世界に生まれた

苦しい……息ができない……窮屈。

安心できる空間から引きずり出される感覚。息をする感覚。寒い。怖い。ペチンとお尻を叩かれる。怖い。

「おんぎゃー おんぎゃー」

赤ちゃんの声？ どこから聞こえるんだろう？ 凄く近くで泣いている気がする。

「姫さま。おめでとうございます。可愛いお姫様ですよ」

「私の子、生まれてきてくれてありがとう。早く名付けをしてあげないと。あの人につけてもらいましょね」

穏やかで安心する誰かの声が聞こえる。目は上手く見えないけど、眩しい。額を撫でられキスをされてる？ とても心地よい感覚だ……優しい匂いの中ゆつくりと瞼を閉じる。

「おんぎゃー おんぎゃー」

あれ？ 意識を失ってた？ また赤ちゃんの声がする。
 ……どこから？ 膾が重い。目を開くと人の影が見えるが、顔は見えない。意識をきちんと保てない。

「ひーさま……ば……む……」

何を言っているの？ 触れられたごつごつした手が痛い。

外にいるの？ ここはどこ？

揺れる感覚でまた膾が重くなる。

「小さなひーさま。お許しを」



多分、赤ん坊に転生してから二か月ほど経ったと思う。まだ首が完全に据わってないが、それでも大分安定してきた。白黒にしか見えなかった最初の一、二週間は凄く不安だったが、視界はまだぼんやりしているものの、色は鮮明に見えるようになった。

今、私に乳を与えているのは母親ではなく乳母だ。どうやら私は、商家の家に転生したようだ。

話し方や服装から現代ではない気がする。言葉が理解できるとは驚きだが、何を言っているか分からず戸惑うよりもマシだ。

残念ながら、今世の両親からの愛情は期待できないようだ。母親は、たまに顔を見せでは文句ばかり言う。

父親は、生まれてから数回顔を見に来たかな？ たった数回だが似てないやら成長が遅いやら……失礼なことしか言わない。まだ二か月だし。

三か月が経った。首も据わり、目もある程度見えてきた。自分の手をグーパーグーパー動かすこともできるようになった。楽しい。

「マリア、お前！ この子供は、ワシの子ではなかるう？ どこも似てない。お前は、愛人の子をワシに押し付けようとしているのか!？」

「あなた、何を血迷っているんですか……この子は私が産んだあなたの子ですよ」

母親のマリアの言い分に納得いかない父親は、ドアを強く叩きつけるように閉め退室する。

この夫婦の不毛な争いは続いている。二人は、この部屋で過ごす度に喧嘩を始める。乳母のメアリーに抱っこされながら、この二人の喧嘩を眺めるのが日常になりつつある。

眠い。そろそろ、お昼寝の時間かな。メアリーが、ウトウトしている私を母親の元へ連れていく。

「奥様、お嬢様のお昼寝の時間になりました。最近、よく動かれていますので、すぐ眠くなるようです」

「髪も生えない子供など気持ち悪いわ。やめて、こっちへ持つてこないで」

「申し訳ありません。奥様」

母親は次第に私を避けるようになり、上手くいかないことを全て私のせいにし始めた。私、ただの赤ちゃんなのに……

「ヘンリー、あなたもその子には近付かないで！ きつと呪われた子よ。泣いたのも初めだけで、あとはそんな素振りもない。この子のせいで夫には不貞を疑われて……踏んだり蹴ったりよ」

「お母さま……」

ヘンリーと呼ばれた子供は私の兄なのだろうか？ 五歳ぐらいの母親譲りの鼻筋の整った顔だ。ヘンリーを凝視すると、優しい微笑みを返される。あの二人の子とは思えない優しい兄だ。

五か月が過ぎた。実はそれまでタイムスリップしたのかと思っていたが、目がはつき

りと見えるようになって分かった。ここは異世界だ。絶対、そうだ。だって乳母のメアリーの手から水が出るのだ。それに私のお尻も『クリーン』と唱えるだけで、不快感が大分なくなる。

異世界転生……そんなこと、本当にあるんだね。

私も魔法が使えるのか？ 人差し指を上げ唱える。

「アウアウ」

そうだった。まだ言葉が発せないのだった。魔法は諦めて練習していた寝返りでも頑張ろう。

ヨイシヨイシヨと……おとおお！ 寝返りができた！

ここ数日、踏ん張っていたからね。達成感と爽快感で機嫌はマックスにいい。ゴロンゴロンとベッドで転がりながら寝返りを楽しむ。

頭上に影が見えたので顔を上げる。ヒイ。父親の顔がいきなりアップで現れる。

「まだ毛が生えないのか？ 女なのに髪が全くないとは……とんだハズレだ。もらい手も買いない娘なんぞいらんわ。お前もいつまで部屋に閉じこもっておるつもりだ。出てこい！」

ドンドンと続き部屋を叩く父親。母親は一か月前から部屋から一切出なくなっていた。

多分、産後鬱。最後に見た時も表情が虚ろで、『お前さえないなければ』とか私に恨み言を吐いていたしね。

赤ちゃんと元凶の私には何もできない。正直、メンタルをやられている母親の側は危険だしストレスが溜まるので、暫く彼女と接しないこの現状も悪くないかなと思いはじめている。

その晩、みんなが寝静まった頃。上から何かで押さえ付けられ、苦しくて目が覚める。シート？ 枕？ 息ができない、苦しい。

「グッグエーオンギャーオンギャー！」

「あら。ちゃんと鳴けるじゃない。死にそうな動物みたいね」

苦しみの犯人は母親だった。般若のように歪んだ怖い顔が目の前にある。

（怖い怖い怖い！ 死にたくない）

ガタツと扉の近くで床に物が落ちる音がする。

「お、奥様！ 何をされているのですか!? おやめください。誰か！ 誰か！」

乳母のメアリーだ。滅多に泣かない私の大声に驚いて、部屋を確かめに来たのだろう。メアリーの叫び声を聞いた他の使用人が子供部屋に集まり始め、最後に父親が入って

きた。

「何事だ!？」

「お、奥様が……お嬢様の顔を枕で押さえ付けてらして……」

父親は舌打ちをしながら、使用人に命令する。

「マグワイア以外は各自の部屋に戻れ。ヘンリー、お前もだ。部屋に戻りなさい」

母親は暴れるので、執事のマグワイアに押さえ付けられていた。拘束されてなお、母親は大声で叫んでいる。

「その子は呪われているんです!! だから死なないといけないんです！」

「お前は、何を言っておるんだ……ついに頭がおかしくなったか？ はあ……まあいい。

早朝に医者を呼ぶ。マグワイア！ マリアを頼む。今晩は、メイドと見張りをマリアの部屋に待機させろ」

マグワイアが母親を宥め、続き部屋に連れていく。部屋に残ったのは、乳母のメアリーと父親だ。嫌な予感がある。私を抱っこするメアリーの服にしがみつく。メアリーは、ここでの私の唯一の味方だ。

「はあ……困ったものだ。この子供が原因だろうか？ メアリー、この子供を教会に置いてこい。マリアが明日起きてこれがいたらまた騒ぐ」

「……しかし、旦那様」
 「いいから早く行け。醜聞しうぶんにならぬよう、ナーザス商会の者だと見つかるなよ。詳細は帰ってきてから聞く」

「……はい」

(捨ててこいつで何か)

さっきは殺されかけた。次は、本当に殺されるかもしれない。

でも……捨てられるのは悲しい。

メアリーが出かける準備をして、私を厚手の毛布くもに包む。その目には涙が浮かんでいった。メアリーはこの家で一番私に優しく接してくれ、一番長く側にいた。彼女はまだ十七歳ほどの少女で、私と同じ歳の子供がいる。

「お嬢様、ごめんさい」

そうやって私は凍える夜に、教会の、人通りのない墓地の入り口に置いていかれた。

(あー詰んだな)

この時の私は知らなかったが、この帰り道でメアリーは馬車に轢かれ、亡くなってしまったらしい。メアリーは、近くの孤児院では身元が発覚するかもしれないと懸念し、私の家であるナーザス商会と関係性が薄い、遠い教会に私を置いていったのだという。



マリアの状態が落ち着いたら三日後。マリアは、寝ていた子を窒息させようとしたことなど忘れたかのように執事のマグワイアにメアリーと我が子の居場所を尋ねていた。

マグワイアは困惑した顔でマリアに尋ねる。

「奥様、三日前に何があったか覚えていらっしゃいますか？」

「三日前？ 何かあったかしら？」

「……メアリーを捜してまいりますので、奥様は寝室でお待ちください。顔色がまだよろしくないようです」

メイドにマリアを任せ、マグワイアが屋敷から出かける。ここ数日は暴れるマリアの世話で主人のティモシーに子の居場所を聞いていなかったマグワイアは、乳母のメアリーが、ほとぼりが冷めるまで暫く実家に匿っていると勘違いしていた。メアリーの実家で彼女が亡くなった事実を知り、急ぎ主人に報告する。

「なんだと!? すぐに子を捜せ！」

「メアリーの家の者は、そのような子は見ていないと。事故現場にも赤子などいなかった

たと。他にどこへ連れていったのか……」

「……教会だ」

「教会ですか？ 何故、そのような場所に？」

「ワシが、教会に置いてこいと指示した。数日いなくなれば問題が解決すると思った。あの子さえ……ああ、ワシはなんてことを」

マグワイアは、精神的に追い詰められていたのは主人も同じだったとこの時に初めて知った。

メアリー死亡の事態を知ったティモシーは、近隣の孤児院をしらみつぶしに捜す。だが、どの孤児院もそのような赤ん坊はいないと首を振った。



置き去りにされて三、四十分くらい経つただろうか？ 寒い。

ハイハイができる年齢だったら、ここからハイハイをして助けを呼ぶこともできたのに！

せめて誰かが私を拾うのを見てから去ってよ、メアリー。ダメだ……泣く。

「うえー……ん。おぎゃああああ……グズツ」

二度目の人生、生後五か月で死す。

私はまだ、今世の自分の名前も知らない。

家では『それ』『あの子』『お嬢様』としか呼ばれたことがなかったのだ。

神め。もしいるのなら、もうすぐ会いに行くから待ってろよ。文句を言ってやる。

「ジョー、この辺りから赤ん坊の声がしたのよ。本当よ」

「マリッサ、ここは墓地だぞ。それも夜に、赤ん坊なんかいないよ。帰るぞ」

「オンギヤオン……ギャ……」

人の声がしたので、最後の力を振り絞り叫ぶ。体力の限界だ。意識が遠くなる。

その時、誰かに抱き上げられた気がした。

「あの子が戻ってきたのよ」

遠のく意識の中ではつきりと聞こえた女性の声。

あの子？ 全身に温かさを感じる。ついに召天するのだろうか？ 神め……文句……

先ほどの冷たい地面とは違い温かい感覚に包まれる。空いていたお腹も満たされ始めている。

「チューチューチュー」

ミルクが美味い……え？ 誰？

無意識に乳房に吸いついて母乳を飲んでいたが、これは誰のだろうか？ 上を見上げるが、メアリーじゃない。

私を抱くその人は穏やかな笑顔でこちらを見つめている。隣には、若い男。

この人たちは誰？

「よく飲むな。一時は、ぐったりして心配だったが……元気になったな。マリッサも大丈夫か？」

「ジョー、ありがとう。母乳がまだ出てよかった。よく飲んでるわね。目が覚めて、あなたたち誰って顔してる」

「四、五か月くらいか？ あんな誰もいない場所に置いていくなんて、何を考えてんだ」

二人の話から分かったのは、この人たちはジョーとマリッサという夫婦で、一か月前にまだ幼い娘が突然死してしまったということだった。人気がない夜中に娘の墓参りに来ていたところ、私を見つけ保護してくれたようだ。私と変わらない年齢の子供を失うのは悲しかっただろうな。

「私、この子を引きたいわ。あの子が戻ってきたような運命を感じるのよ」

「マリッサ……引き取るのは賛成だが、この子はあの子じゃないぞ」

「分かってるわ。でも……神が引き合わせてくれた気がするの。こんなに可愛い子を放すなんてできないわ」

神か……もし存在するなら、いの一番に文句の一つでも伝えたい相手だ。正直、あそこで凍死していたら本気で神を恨んでたと思う。

「それにしても……見事にハゲてるな。髪は生えるのか？」

地味に気にしてること……そんなにハゲてるの？

自分では頭は見えない。ペチペチと頭を叩いてみる。

「あら……ジョーの言葉を理解したのかしら？ そんなに頭を叩いてはダメよ。ここにちゃんと髪の毛はあるから……あら？ これって金髪かしら？」

「確かに、下のほうには生えてるな。色は、産毛だからよく分からないな」

「そうね。名前は どうしましょう？ 服にも何も書いてないわね。私たちで名付けしていいのかしら？」

「『ミリアナ』はどうだ？」

「いい名前ね。ミリアナ・スパーク……愛称は、ミリーかしら？ ミリーちゃん、新しいママとパパでちゅよ」

こうして私は無事にジョーとマリッサの養子のミリアナ・スパークになった。こちらの平民には戸籍制度はないらしく、貴族でない限り養子縁組などの手続きは不要なのだと随分後で聞いた。

無事にスパーク夫妻に引き取られ八か月になった今、私はハイハイをしている。

これで行動範囲が広がる。ミリアナ八月、ほぼ寝たきり生活とはおさらばします。

この頃、スパーク夫妻は王都東区にある宿屋を購入。リフォームして私が一歳になる頃には【木陰の猫亭】という宿をオープンした。

スパーク夫妻は二人とも平民だが、マリッサは裕福な商人の娘。ジョーは、平民から叙爵したエードラーの息子だ。ジョーの父親は、魔道具開発の功績でエードラーの爵位を賜っている。エードラーは、準男爵に似た地位だが正式に貴族として扱われると聞い

た。二人は結婚時に双方の親から当面の生活資金を祝いとして受け取っていた。

ジョーが二十一歳でマリッサは二十歳。二人とも実年齢より年上に見える。この世界ではコネは使いまくるものらしいので、商人と貴族のコネがある二人はきちんとした不動産屋で騙されず木陰の猫亭を購入することができたようだ。

「ミリーちゃん、やっぱりあなたの髪の色は金髪なのね。それも純金より赤みのある色。目立つから帽子を被っていきましょうね」

「おあーしゃん、ありあと」
子供舌め。



木陰の猫亭は、オープンして一周年を迎えた。私も二歳になった。相変わらず、髪の毛の色問題で未だに帽子を被っての外出。宿屋のお客さんの前にはあまり出ないようにしている。

宿屋は、それなりに繁盛しているようだ。ただ、経営は上手くいっているように見えるのに、従業員は未だジョーとマリッサの二人だけだった。

家族の部屋は、宿屋の四階部分にある。私は、ほぼ一日中一人でそこにいる。暇でたまらないが、マリッサは私が金髪なのを懸念しているようだった。

確かに、この辺で見た髪色は今のところ茶や赤茶や黒ばかりだ。マリッサの気持ちも分かるので、私は勝手に外に出ないようにしている。

今日は、家の中の探索をする予定だ。私は二歳の今、どこでも移動可能なのだ。ずっと気になっていた魔法関係のものを探したい。魔法は、ライトとクリーンそれから乳母のメアリーが使っていた水魔法、あとは髪を乾かしてくれるマリッサの風魔法以外まだ見たことはない。話すことができるようになって私も使えるか何度か挑戦したが、上手くいかなかった。

ガサガサガサ。

棚の近くの袋を漁る。うーん。布しか入っていない。

あ……またトイレの時間だ。子供の身体ヤバイ。自分でトイレに行けるからオムツこそ取れてはいるが、オシッコにすぐ行きたくなる。ちなみにここでの子供のトイレは基本的にオマルだ。最初は使うのに凄く抵抗があったけど、今では余裕だ。

トイレも無事終わり、再び探索を開始しようと歩き出したら、マリッサが部屋に帰ってきた。

「あら、何をしているの？ お昼の食事を持ってきたわよ」

「たんしゃく！」

「探索かしら？ 一体どこでそんな言葉を覚えたのかしら？ 話を始めるのも早かったから、ミリーはきつと賢いのね」

マリッサに頭をヨシヨシされる。褒められるのは嬉しい。……中身は三十代だけど。

今日の昼食はパンとミルクシチュー。パンは硬いので、マリッサが細かく千切ってシチューに浸してくれる。

「ミリー、熱いからフーフーするのを待ってね」

マリッサは疲れているのか、目の下にクマができています。

「おかしさん、おひるね」

「あら。お母さん眠そうかしら？ 少し時間があるから横になろうかしら」

私も寝室に連れていかれる。探索の途中なのに！ まだ眠りたくない。マリッサが身体をトントンと撫で子守唄を歌い始める。あ……ヤバイ。

……グー。

——はっ。寝てしまったか……あれは魔性の子守唄だ。歌い始め三秒で眠れる。

起きてみれば隣にマリッサはもういなかった。二時間ほど寝ただろうか？ 外はまだ明るい。

今、季節は夏。ここは日本と違ってそんなに暑くはならないが、日は遅くまで出てる。ボーン、という音がして、五回、鐘が鳴った。ということは……午後二時だ。この街では、朝の六時に一の鐘が鳴り、そこから二時間毎に八の鐘まで鳴る。一秒の長さや、時間が六十進法であるところは地球と変わらない。

中断していた探索を再開すると、頑丈な作りの収納箱の中に本を見つけた。ネックレスなどの貴重品も一緒に入ってるので、ここでは本も貴重品のだろう。

重い本を箱から出して、本の留め金を外し開ける。凄い……全部手書きだ。それに絵の部分はカラーだ。使用してる紙は植物紙かな？

字も読める。よかった。二度目の人生でも語学を習得しないといけないのかと思った。私に手にしているこれは、魔道具に関する基礎の本のようだった。どこかに魔法の本もありそう。ガサガサと箱を漁る。

えーと……こっちの巻紙は植物紙じゃない。何かの皮？ 契約書っぽい。この宿の売買契約書のようだ。売買価格は金貨十一枚、それがいくらなのかは分からない。

お、ついに魔術書らしき本を見つけた。読むと魔力や属性のことが書いてある。当た

りだ。とりあえず他のものを片付けて魔術書を読み始める。

魔術書によると、魔力はそれぞれ持てる容量が決まっているらしい。多くの人は四大元素の水、火、風、土魔法から一属性だけが使える。二属性使える者は稀で、今まで確認された三属性持ちは五人のみ。

その他、レアな属性に白と黒があり、国や地域別に存在する属性もあると書かれている。それに加えてここには、水魔法の上位の水魔法などの話も書いてある。

魔力が高い、または二属性以上の適性を持つていけば王都学園へ入学可能らしい。授業料は無料だが……生活費がかかるから庶民では行けなそうだ。

魔力量は五歳になると教会で測れる。その時に、生活魔法なども伝授してくれるらしい。

宗教か……ちよつと苦手。

体内の魔力を活性化させて循環する方法が本には書いてあるが……分かりにくい。

『魔力とは一つの存在のみならず全てのものとの対話だ。即ち極めれば、神とも対話は可能であろう』

どこかの宗教詐欺だと思えないフレーズ。

神との対話……

要約すると、頭と胸と腹に宿る魔力が全身に漲るみなぎって話？ 力つてのが魔力なんだろう。

その後、五ページにもわたって延々と神との対話について語っているが、この魔力がどうやって全身に漲るのかは書いてない。……ん？ この絵は血液循環？ 全身に漲るってそういうことか！

集中しすぎたのか、ぶるぶると身震いする。

「あ！ いいちよころなの！ もれちゃう！」

ちよつとオシッコタイム。タイムイングを逃すと漏らしてしまう。ふー、スッキリ。

トイレも無事に済んだので、床の上で足を組み目を瞑る。

「しゃーこい！」

心を落ち着かせ、今、私は神との対話を試みている。魔力の漲らせ方は分かったが……魔力がどうやって出てくるのかが分からない。

「んーんー。ぶはっ」

息を止めてもダメだな。

よし。今度は神に物欲をぶつけてみよう。

お菓子食べたーい。ケーキ食べたーい。死んだ月に予約していたベルギー産の限定

チョコ食べたかったな……コズモシリーズの甘酸っぱい克蘭ベリージュレ、ピターなオランジェのチョコレート。サクサクのナッツ。あーマイシヨコラー。

ぐわああと身体の中心が熱くなる。気持ち悪くて吐きそう。吐き気が治まったら、今度は全身が熱い。五分ほどしたら熱さがなくなり、身体の中の温かさだけが残る。

今の、なんだったんだ？ ん？ おおお。全身が光ってる。

ピカピカの二歳だね。これが魔力？

すぐに全身の光は収まったが、身体の中には魔力をきちんと感じる。

これを循環させるのか。血液循環をイメージして身体の隅々まで魔力を流す。魔力が一気に全身に流れ温かくなる。

(今だったら、できるかも)

灯りをイメージして指先に魔力を集めて唱える。

「りゃいと！」

目の前に豆電球サイズの光が現れた。これが魔法か！

豆電球に触っても熱くない。豆電球をもう一個出す。おおお。感動。豆電球をどんどん出す。合計五個出たところで、気持ちが悪くなりそのまま気絶した。

「ミリー！ どうしてこんなところで寝てるの？ それに本まで出して。本は高いのよ。遊びで触ってはダメよ」

マリッサの大声で目が覚める。

寝てた？ 辺りはすっかり暗くなっており、夕食を持ってきたマリッサに叱られる。目の前にあつた豆電球は消えていたけど、豆電球の現れていた場所に違和感がある。濁って見えるというか、灰色の何かがある。これ何？ 消えるのかなと思つたら、濁って見えていた部分がスッと消えた。なんだつたんだろう？

夕食後にはマリッサに身体を洗ってもらう。私はまだ小さいから桶に入るが、大人は朝に入浴するらしい。入浴といっても水を被り身体を洗うだけだそうだ。パン屋の横にパン屋の経営する風呂屋もあり、週に一回は入りに行っているようだ。なんでパン屋と同じ経営者なのかと思つたが、パンを焼く時のかまどの熱を風呂屋に利用していると聞いた。

マリッサの風魔法で髪を乾かしてもらおう。

「はい、ミリー。乾いたわよ」

マリッサが魔法を使っていた部分には先ほどの豆電球の時より微弱な濁りが見える。やはり、こんなの前は見えてなかった。魔法が使えるようになったからだろうか？ で



も、この濁りはマリツサには見えてないようだ。魔法の痕跡的な濁り？ 濁りはそれから暫くあったけど、そのうち薄くなって次の日には完全に消えていた。

「イタズラをしたと聞いたぞ。ダメだぞ、勝手に色々触っちゃ」

仕事を終え、部屋に帰ってきたジョーにも怒られる。

猫亭には従業員はいないが、宿屋の夜番には冒険者ギルドから冒険者を雇っているらしい。

夕食の後に片付けを終え部屋に戻ってくるジョー。その後はほぼ毎晩、私との時間になる。話すことは大抵、宿の仕事の話だが、そこから得られる情報も多い。

何よりもジョーに甘えられるのは、この時間だけだ。私も毎晩、この時間を楽しみにしている。今日は、怒られているけど……

「ごめんなちゃい。ほんがあったの」

「そうか。本か。でも、ミリーは字が読めないだろう？ 意味が分からないだろ？」

読めるけど、子供らしいことを言っておく。

「えがあったの！」

「絵か。とにかく、あの本は古いが、高いから触るのはダメだ」

「……もうちない」

次の日、本が入っていた箱にはネジのような鍵がかけられていた。魔術書は一応最後まで読んでいたからよかった。魔道具の本も気になるけど……もう少し成長したら見せてもらえるか聞いてみよう。

どうやら昨日は魔術書に注意書きされていた魔力切れを起こし、そのまま倒れてしまったようだ。魔力が枯渇して時間をおいて復活したの？ 魔力の量は決まっていると書いてあったけど……豆電球五個分しかないのかーい。

「らやいと！」

豆電球が出てくる。心なしか昨日より楽に出せた。四個豆電球を出す。雰囲気的に五個出しても大丈夫そうなので、五個目の豆電球を出す。魔術書には魔力切れを起こせば、暫く体調が悪くなるため注意するようにと書いてあった。でも、気持ち悪さはない。全然大丈夫だ。まあ、魔術書には五歳にならなければ魔法を使えないとも書いてあった。あの本に書いてあることが全て真実とは限らない。それに、どちらかと言うと……体内の魔力が大きくなった気がする。もしかして、転生特典？ 枯渇を繰り返せば魔力量は増えるんじゃない？ 枯渇っていつでも少し気持ち悪くなって気絶するだけだし。魔力切れを何度か試して問題が出てきたら枯渇活動はやめよう。

そう思っていたら、豆電球を七個出したところでまた気絶した。

「ミリー、お昼よ。どうしてまた床で寝ているの！ ベッドで寝なさい。今日は野菜スープとパンよ」

マリッサに心配そうな声で起こされる。目の前には、また例の濁り。消えろと願うとすぐに消えてなくなった。マリッサが気づいたか様子をうかがってみるけど、『早く食べにいらっしやい』と昼食をテーブルに並べている。昨日ジョーにも魔法の痕跡は見えてないようだった。普通に、濁っていた部分を通っていた。ジョーたちには見えないようだけど、他の人で見える人はいるかもしれない。魔法の痕跡は消せるみたいだから、今後も魔法を使った後は消していこう。

枯渇の後はお腹が空く。スープは薄いけど、子供にはちょうどいい塩梅。もぐもぐ食べて、お腹いっぱいになる。

午後からは、また魔法の練習をする。ライト以外の生活魔法のクリーンやファイアも無事習得した。

数週間、色々試して分かったのは……私はどうやら全属性の適性であるらしい。魔術書に載っていた属性は全部使うことができた。魔術書には、魔法の使い方は詠唱とかよりも、結局はイメージが重要と書かれていた。例えば、イメージすれば水はボールの形にもできるし、雫のようにポタポタと垂らすこともできる。

それから、白魔法はもの凄く魔力を使用するため、代表的なヒールなどは一発の使用で気絶した。

全属性のことはジョーたち含め誰にも言わないつもりだ。毎日、午前中と午後に魔力を枯渇するまで使い、何度も気絶する。病気なのではないかとマリッサには心配されたが昼寝と誤魔化した。

こうして私は日に二回の気絶を繰り返しながら、魔力量を増やし三歳になった。何度も枯渇気絶をしていくうちに、魔力の残量や枯渇のタイミングはある程度コントロールできるようになった。

「ミリーの髪の毛も大分伸びたわね。こんな色の金髪、見たことないわ。そろそろ、ミリーも外に出てたくさん遊んでほしいのだけど……この髪色は目をつけられてしまうかもしれないわ」

ジョーとマリッサが話し合った結果、私の髪を染めることにしたらしい。染粉を溶かした、緑色の粉っぽい液体を頭に塗られる。

大丈夫……？ これ。

不安だったけど、仕上がった髪色は赤っぽい茶色だった。これなら似たような人も多くいるから大丈夫そうだ。

「これなら大丈夫ね。ご近所さんが、ミリーは病気なのかって何度も聞いてくるから困ってたのよ。明日にでも紹介に行きましょう」

マリッサが楽しそうに、近所の人の話をする。

次の日、ついに私はご近所デビューをした。今、紹介されているのが隣の薬屋の女将ジゼルさんと息子のマイクだ。ジゼルさんは私を病気だと心配していた婦人だ。

「ミリーちゃんは、本当に可愛らしいわ。うちは男の子しかいないから、女の子も欲しいわ。ほら、マイクも挨拶なさい」

「おう。俺、マイク。よろしくな」

マイクは五〜六歳くらいだろうか？ ジゼルさんにはマイクの上にもう一人息子がいて、薬屋の見習いとして働いていると教えられた。上の息子は、父親と薬草を取りに出かけているため、後で紹介すると言われた。

次に紹介されたのが、油屋の娘二ナだ。二ナは、母親の後ろに隠れて出てこない。人見知りの年齢だろうか？ 私と同年代に見える。

「私、ミリー。二ナちゃんよろしくね！」

「……うん」

恥ずかしそうに母親の足の間から挨拶をする二ナはとても可愛らしかった。

私のご近所デビューも無事に終了して、マリッサの買い物で市場に連れていかれる。抱っこされ連れてこられた市場。この大きな市場には初めて来た。いつもは近所の小さな店に連れていかれていたから。近所の店ではツケで払うので現金も見ることがない。

大きな市場は、マリッサの足で二十分以上歩いた場所にあった。出店数も多く、賑わっている。

「ミリー、ここで買い物するから下ろすわよ。側にいてね」

そう言われ、地面に下ろされる。

ここは何屋なのだろうか？ 櫛くしに木製のカップや皿が並び、石鹼けんに使われるムクロジの実も薄い布袋に入れて売られている。日用品店かな？

マリッサがムクロジの実を数袋と箸はしを購入する。

「小銅貨五枚だよ」

お金の受け渡しおごまが行われるが、ここから見えない。

「お母さん！ お金が見たい」

「あらあら。ミリー、これは食べ物じゃないわよ」

マリッサに食べないと約束をして、小銅貨といわれる硬貨を見せてもらう。小銅貨は十円ほどの大きさで、何かが彫ってある。傷んで見えにくいのが、鐘のような形に見える。

この小銅貨五枚でムクロジの実数袋と箒を買えたのか。

「お母さん、これで他に何を買えるの？」

持っていた小銅貨をマリッサに見せながら聞く。

「ミリーは、本当になんでも興味を持つからね。そうね。今日は、ジョーに頼まれて野菜も買う予定だから、八百屋へ行きましよう」

マリッサと八百屋に到着する。売られている野菜は前世のものときほど変わらないように思える。いや、謎の足のついた大根みたいなものがある。形は大根だけど……どす黒い色だ。

謎の大根型野菜を確かめようと手を伸ばす。

「嬢ちゃん、触るのはダメだ」

八百屋の店員に注意される。

「ごめんなさい」

「これが気になるのか？ これはブラックラディッシュだ」

普通に黒い大根だった。

「なんだあ。何かの魔物かと思った」

「おう。魔物はうちには置いてねえんだ」

（え？ 魔物いるの？ え？）

八百屋の店員はそのままマリッサから注文を取り始める。魔物の話は！

「合計で小銅貨三枚だ」

マリッサが購入したのは、人参、芋、豆類にキャベツだ。スープの具材だ。たくさんある。野菜は日用品に比べて安いようだ。小銅貨一枚で日本円の百円くらいだろうか？ 帰りは半分の距離をマリッサに抱っこしてもらい、残りは歩いて帰った。途中通った肉屋には何かの足がぶら下がっていた。

「お母さん、あれ何？」

「あれは、魔物専用の肉屋よ」

この世界やっぱり魔物いるんだね……家に帰り、また魔法を連続で放ち枯渇気絶をした。こう何度も気絶して私の身体、大丈夫？ 不安だけど、ヒール一回でぶっ倒れるほうが不安。

「ご近所デビューから一年、四歳になった。」

前は髪の毛問題であまり外に出られなかったのだが、今では毎日のように外で遊んでいる。あと、オシッコスパンが長くなった。

「ミリー、今日は噴水まで行こうぜ」

これは薬屋のマイクだ。年齢は私の一つ上の五歳だが、体格はがっしりとして年齢よりも上に見える。

「噴水まで遠いから危ないよ。ダメだよ」

こっちは油屋のニナだ。この一年、私は二人とよくつるんでいる。精神年齢三十四歳でおままごとや泥んこ遊びをやっている。

「噴水か。少し遠いけど、親の許しが出るならいいよ」

「ミリー、またそれかよ！ 母さんが許すわけねえよ」

マイクの後ろに急に現れた影を見上げる。ジゼルさんだ。

「マイク！ それは、アンタが頼んだ仕事をほっぽって遊びに行くからだろ！ 葉草の

瓶の掃除は終わったのかい？」

答えを待たず、マイクがジゼルさんの拳骨を食らう。

「いつてえ。母さん、ちゃんとやったって、やった！」

「本当かい？ 右上の青いのもだよ？」

「あー。それはやってねえな。いつてえな！」

本日二回目の鉄拳を食らったマイクは、渋々と店に戻る。マイクは五歳になったので、店の手伝いを始めている。私も来年五歳になったら、宿屋の手伝いをする予定だ。

マイクがいなくなったので、ニナに遊びたいことを聞く。

「ニナちゃん、何して遊ぼうか？」

「ニナ、おままごとしたい」

ニナは、女の子の子している内気な子だ。遊びは基本、家の中でもできるおままごとを好む。生粋のインドア派だ。マイクと真逆で面白い。

「いいよ。じゃあ、ニナちゃんの家に行く？」

私の家には、ニナの家にあるようなおままごとセットはない。ただ、このおままごとセットも小さな食器と、リボンをあしらったエプロンくらいだ。

私はおままごとセットには興味がないので、五歳の誕生日には、本のプレゼントをお

ねだりしている。

ニナが満足するまでおままごとは続き、家に帰る時間になったので帰宅した。

「ミリーちゃん、おかえり。また大きくなっただんじやないか？ 今日夕食はオークカツだよ。ジョーさんがさつきいっぱい揚げてたよ」

「やったね。わーい」

この人は、冒険者のザックさんだ。二十代前半の茶髪の犬っぽい人だ。よく猫亭を利用してくれている常連さんでもある。

「ザック、誰だ？」

「この宿の娘さんだよ。ミリーちゃんっていうんだ。可愛いだろ？」

ザックさんに尋ねたのは初めて見る人だった。フードを深く被っているので顔がよく見えない。

「ミリーです。うちの宿のお客さんですか？」

「……………」

フードの男には質問を無視されたが、代わりにザックさんが答えてくれる。

「こいつは、俺のパーティーメンバーのウイルだ。長く活動を休止していたけど、最近また戻ってきたんだ。今は、ここに泊まっているよ」

「そうなんですね。木陰の猫亭のご利用ありがとうございます」

「……………ああ」

ぶつきらぼうに返事をされる。冒険者の中には、そういう人も少なくないので気にしない。

ザックさんが『ウイル、小さな子相手なんだからもう少し笑えよ』と注意するもウイルさんはそつけない態度だ。

「しかし、ミリーちゃんは相変わらず、どこでその言葉使いを教わっているんだ？ 四歳児なのに凄いな」

ザックさんが笑顔で尋ねてくる。

平民は、基本ガサツな言葉使いの人が多い。少しでも丁寧に話すとお貴族様みたいだと言われる。

エードラーというジョーの父親を含め、お貴族様には私はまだ会ったことはない。

ジョーもマリッサもあまり両親の話をしてない。ただ、前に少し聞いた話では、ジョーの父親が魔道具の功績で平民からエードラーになった人でマリッサの実家は商家だ。その他の情報はない。二人は両親と仲が悪いのかな？

ザックさんたちに挨拶をして厨房に入った。

「お父さん、ただいま。今日の夕食は、オークカツなの？」
 「おかえり。情報早いな。さすが食いしん坊。後で出してあげるから、部屋に持って
 行って食え」

このオークカツは、私の教えたレシピだ。

初めは豚だと思っていたけれど、材料は魔物のオークである。

魔物を食べることにへの抵抗？ 美味しさのほうが余裕で勝った。

それにしても、前世のレシピを私が初めて伝えた日、ジョーたちは実際どう思ったの
 だろうか？

変な子だと思われたくはなかったが……だって……毎日ミルクスープカステーキか
 野菜のスープだったのだ。現代日本の食事を知ってるからこそ、その無限ループが辛
 かった。

「ミリーの好きなリングオチップスもあるぞ」

「お父さん、最高！」

「なんだ、その親指は？」

ジョーが首をかしげながら、私が高々と立てた右手の親指を凝視する。左手の親指も
 立てジョーに見せつける。

「エへへ」

「分かったから、ほら、リングオチップスでも食っておけ」

ジョーが、リングオチップスを数枚のせた皿を渡してくる。このリングオチップスも私が
 考案したものだ。

だってここ、甘味ないんですよ。いや、あるんだけど平民にはお高いし、街の中央区
 の商店でしか売ってないらしい。ここから街の中央までは乗り合いの馬車で一時間以上
 かかるから行ったこともないし、その機会もない。それなら、森に行って色々な季節の
 果物を採ってきたほうが簡単でお金もかからない。

森の実りは、誰でも自由に採取できる。葉屋の亭主のゴードンさんが採取したリング
 を分けてもらって、オーブンで乾燥させチップスにして保存しているのだ。オーブンの
 微調整は難しいのだが、ジョーが火魔法属性のおかげで、いい具合にリングオチップスが
 出来る。

中央の商店にもリングオは売っているが、一個小銅貨五枚もするとのことだった。確か
 に、以前宿に泊まった商人が見せてくれた商店のリングオは、形が良くて大きかった。森
 で採れるのと比べると上質なリングオだ。それに森のリングオは小さく酸っぱい時がある。
 この国で甘味は、とにかく高価なのだ。

この国のお金は鉄貨、小銅貨、銅貨、銀貨、小金貨、金貨がある。日本円にすると鉄貨の価値は十円、小銅貨は百円、銅貨は千円、銀貨は一万円、小金貨は十万円、それから金貨は百万円だ。あくまでも、私の予想だけど。小金貨や金貨は未だ見たことない。金貨の上には庶民では見ることがないだろう大金貨や白金貨もあるとのことだった。これは、猫亭の商人の常連客に聞いた。

先ほど言った通り、リングは一個小銅貨五枚、つまり五百円もするのだ。

ちなみに、私のお小遣いは週に小銅貨一枚。百円程度である。商店のリングを一個買うのに、五週間もお小遣いを貯めないといけないのだ。

ジョーからオークカツを受け取り部屋に戻って食べた後、リングチップスをしゃぶりながら本日二回目の気絶をした。



ついに五歳になった。

実際に私が生まれた日付は分からないが、ここは春夏秋冬で誕生日をまとめて祝う。

私は、夏生まれとなっている。

「ミリー、五歳おめでとう。プレゼントは、お母さんからはこれね。お父さんからはこれよ」

マリッサからは、青のレースのリボン。ジョーからは、念願の本をプレゼントされた。早速マリッサに、髪にリボンをつけてもらおう。我ながら、可愛いんじゃないかな。そして本は……おう、神様イラストが表紙の本だ。

「お父さん、お母さん、ありがとう。大切にするね」

二人に抱きつくと、ジョーが照れ隠しのように、忘れていた五歳児のイベントの話をする。

「ミリーも五歳になったから、教会で魔力を測らないとな」

(あー、そうだった)

ここでは五歳になったら魔力量を測定されるんだった。

多分、気絶訓練を続けた私の現在の魔力はとんでもない量だと思う。平均を知らないんで、なんとも言えないけど……ジョーたちの魔法を見る限り、私の魔力は普通の量をはるかに超えていると思われる。

「そうね。いつ行こうかしら？ その日は測定に影響するから、体力を使わないようにしないとイケないわね。魔力が多いと、王都学園に入学ができるのだけど、貴族にも目